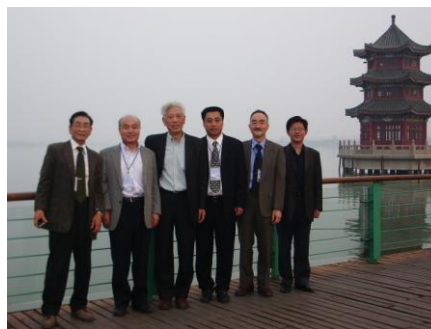


## 第 16 回国際 SPACC シンポジウム (SPACC16 in 聊城) 報告

2009年10月28日から30日、中国山東省聊城市の聊城大学(Liaocheng University)においてSPACC16「第16回国際SPACCシンポジウム——機能性錯体とその応用」を開催した。日本側から22名(教員15名, 学生7名)が参加し, 中国側からは127名(教員20名, 学生107名)が参加して盛大なシンポジウムが催され, 活発な討論が行われると共に互いの親睦を深めた。

ここ10年ほどの中国の科学技術の進歩は著しいものがあり, 錯体化学の分野も例外ではない。今後の錯体化学をはじめとする21世紀の化学は日中を中心として発展していくと思われ, 本シンポジウムが, 第7回の香港, 第8回の北京, 第12回の天津に続く, 4回目の中国におけるシンポジウムであることは, 先端錯体工学研究会がそのことを早くから先取りし日中の絆を深めることに貢献していることを示している。今回は, 実行委員長を譚相石教授 Prof. Xiangshi Tan (復旦大学 Fudan University) に御願いし, 日本側実行委員長山口(首都大学東京)が協力しつつ準備を進めた。副実行委員長は聊城大学の尹汉东教授 Prof. Handong Yin と窦建民教授 Prof. Jianmin Dou および藤井有起教授(茨城大)と矢野重信教授(京都大)に御願いした。

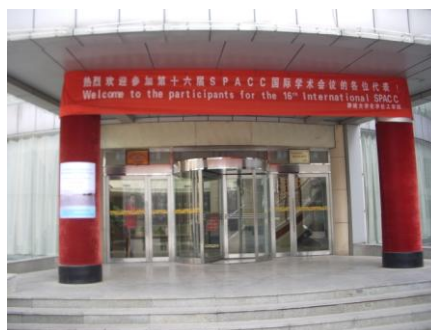
聊城(リョウチェン、Liaocheng)は山東省の西に位置する工業都市で, 古くから交通の要所で市内近郊には黄河が流れる水の都であり, 近くには世界遺産の曲阜および泰山がある。なぜ聊城大学でシンポジウムを開催することになったか, その経緯をご紹介すると, 当初, 藤井先生から藤井研にかつて在籍したこともある上海の Tan 教授に主催を御願いしたらどうかとのご提案があった。交渉を御願いした結果, 上海は物価も高いので Tan 教授の出身大学である聊城大学で開催することとなった。



右から3人目が Tan 教授

聊城には空港はなく, 最寄りの空港である山東省済南市の済南空港から車で約2時間かかるため, 聊城大学が車を用意し日本からの参加者全員を大学まで運んでくれた。日本から済南空港までのアクセスは, 上海, 杭州, 北京などを經由する便がいくつかあり, 上海経由の場合, 羽田 0925 発で済南空港 1620 着であった。

会場入り口



一日目は登録および懇親を兼ねた夕食会が催され、二日目の開会式で聊城大学学長の Li 教授の開会の挨拶をいただき、発表がはじまった。



開会式の様子

中央は聊城大学学長 Li 教授  
左から 2 人目が Huang 教授  
(写真提供：船引先生)

最初の基調講演は、中国における生物無機化学のパイオニアとして著名な Fudan University の Huang 教授による” Structure-Property-Reactivity-Function Study of Human Neuronal Growth Inhibitory Factor (hGIF)”であった。続いて 2 件目の基調講演は、大分大学の天尾准教授の” Enzymatic Carbon Dioxide Conversion System Based on the Artificial Photosynthesis”で、これは先端錯体工学研究会奨励賞の受賞講演を兼ねたものだった。さらに午前と午後に合わせて 14 件の招待講演があり、その後、夕食会が開かれ山東料理に舌鼓をうちつつ親交を深めた。



左から Dou 教授, Tan 教授,  
Yin 教授

二日目は午前中に 11 件の招待講演の発表があり、昼食後のポスター発表に続いて、さらに 4 件の招待講演があった。いずれも大変中身の濃い発表であり、多くの質問や意見が交わされ、今後のさらなる発展を大いに期待させる内容であった。数時間の市内観光の後、再び会場のホテルに戻り、和気藹々とした雰囲気の中で閉会式を行いバンケットとなった。中国式の大きな丸テーブルを囲んで、山海の珍味を楽しみながら日中友好とお互いの今後の研究の発展を願って老酒の乾杯を重ねた。なお、聊城大学には日本語学科もあり、その学生さんが通訳として大勢来てくれたので大変助かった。皆明るく親切で、シンポジウムの成功は彼・彼女らの貢献によるところが大きい。

この席上で講演賞とポスター賞が授与された。写真でもわかるように、講演賞5名(日本2名、中国3名)とポスター賞10名(日本3名、中国7名)と、内容のレベルの高さを反映して多くの発表者が選ばれ、賞状及び副賞が授与された。日中共に若手研究者や学生の熱気あふれる講演が印象的だった。



講演賞の受賞者



ポスター賞の受賞者

3日目はエクスカージョンとしてバスで泰山へ向かった。泰山は古来、山岳信仰の対象であり、また帝王が天と地に王の即位を知らせる封禪の儀式が行われる山として名高く、現代でも庶民の間で人気がある。



この岩の絵が描かれた5元紙幣をもって、みんなで記念撮影

山東省には100年前と変わらないような古い町並みがまだ残っている一方で、近代的な高層ビルや高速道路がどんどん建設され、特に若い人たちの目が輝いていることが印象的だった。また、山東省は環境政策では最先端にあり、人々がみな電動バイクに乗って音もなく走り回っているので驚かされた。中国の発展の速さとパワーに触れ、日本もこれから中国の友人を大事にして、お互い切磋琢磨しながら研究に励んでいかねばと決意を新たにした。最後に、今回のシンポジウムに参加し協力して下さった多くの方々に心からお礼を申し上げたい。

首都大院都市環境  
山口素夫